

このたびの東日本大震災で亡くなられた方のご冥福をお祈りいたしますとともに、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。自然科学書協会では、出版界の各種取り組みに協力し、被災地の一日も早い復興を支援いたします。 社団法人自然科学書協会

[自然科学の時間—筆者と読者の絆]

数学書執筆の思い出

志賀浩二（東京工業大学名誉教授）

JCOPY の意義とその役割

<http://www.nspa.or.jp/>

[自然科学の時間—筆者と読者の絆]

数学書執筆の思い出

志賀浩二
東京工業大学名誉教授



一握りの専門家だけの難解な世界と思われがちな学術書にも、1冊の本にまつわる、心温まる人間ドラマや興味深いエピソードがあります。著者と読者の見えざる絆や著者の気苦労をうかがい知ることができるエッセイです。

私が数学の本をいろいろ書いてきた中で、いくつかの思い出を述べてみよう。朝倉書店から出版された『数学30講シリーズ』は偶然の機会から生まれたのである。第一刷目が刊行されたのが一九八八年三月だから、一九八七年初夏のことだったと思われる。当時私は東京工業大学（以下、東工大）に勤めており、昼下りひとり研究室にいますと、突然見知らぬ編集者が扉を叩いた。それが今でも

ずっとお世話になっている朝倉書店の森田豊さんとの最初の出会いであった。森田さんは、「東工大にきたので、ちょっと寄らせて頂きました」といって入ってこられ、雑談しながら、数学の本を書いてみないかと勧められた。それまで数学書というところ、大体、章・節を区切って、体系的にまとめることが慣行のようなことになっていった。私はこれでは一章を読んでも、必ずしも次の章へと移る興味が湧かないのではないかと思っていた。読んで学んだことに一歩、一歩達成感がある区切りを設け、さらに先に進んでみようという期待を読者に持たせるような本があってもよいのではないか。こうした思いの中から30講の構想が浮かび、微分積分30講を書いてみたいと森田さんに伝えた。早々に森田さんが諮ってみると、『講』という言葉は古すぎるといふ意見が強かったそうである。しかし、『講』という言葉を使えば、読者に訴えるものがあると考え、森田さんにはご迷惑だったろうが、押し切らせてもらった。その年の夏休みにこの形式を模索しながら筆を進めてみると、予想もしていなかった事態が起きてきた。20講を過ぎた頃から、残り9講、残り8講という枠組みが重くのしかかってくるのである。このような形式は、あらかじめプランを決めて取りかかるわけにはいかない。煉瓦を積んでいくような作業だから、前に書いた部分を書き直すわけにもいかない。それでも何とか、30講を仕上げたが、もうこんな本を書くのはこりこりだという思

いで憔悴してしまった。しかし少し経つと、一つの講が終わるたびに、次第にゴールが迫ってくるあの30講の緊張感に、もう一度挑戦してみたいという気持ちが出てきた。結局一〇冊からなるシリーズを書き上げてしまった。30講シリーズを約二年半くらいで書き上げてしばらくしてから、岩波書店の宮内久男さんから、一度お会いしたいという連絡が入った。岩波の応接ルームで、宮内さんは私に「中学生向けの数学の参考書を書いて頂きたい」と述べられた。私は即座にお断りして、席を立ちかけたとき、宮内さんはすぐに私を引き留めて「では、一体どんな本なら書いて頂けるのですか？」と尋ねられた。私はそのとき「誰でも手にとってもらえるような、広く平明な本を書いてみたい。」というように答えたように記憶している。それからしばらくして、私は宮内さんに「数学が生まれる物語を書いて頂きたい」と申し出た。結局それは出版して頂けることになったが、企画会議では『数学が生まれる』という題名にかなり批判的な意見が多かったということを知った。この『数学が生まれる物語』には後日談がある。私の親友である京都大学教授であった上野健爾さんが、当時次のようなことを話してくれた。「京都でいつものようにバスに乗ったとき、初老の人が、停留所で止まっても全然気がつかず夢中になって本を読んでいた。それが数学の本だと知って、誰の本だろうと思ったら、

『数学が生まれる物語』だった。数学が、これほど人を夢中にさせられるものかということを、初めて知った。」

上野さんは、この後あたりから数学の啓蒙的な仕事にも積極的に踏み込んでいられるようになった。

東工大を定年前に辞めるにあたって、私はそれまでの数学にかけてきた思いを、学生時代に強い感銘を受けたバナッハに託して書いてみようと思った。『無限からの光芒』はこうして生まれた。この扉にある『汝の車を星に繋げ（エマーソン）』は当時の私の気持ちを伝えている。

この本と、その後に書いた『数の大航海』では、当時日本評論社におられた亀井哲治郎さんに励まして頂き、いろいろな面でお世話になった。ここで改めて感謝の気持ちを述べて置きたい。

東工大を辞めてから移った桐蔭学園では、学園長の鶴川さんが私の新しい形で数学教育を試みたいという考えを支持して下さって、四〇〇人も入る大ホールで東大や、京大の先生方を招いて、高校生に向けての数学のシンポジウムが開かれるようになった。これとは別に春と秋には、二〇〇人くらい入る講義室で一般向けの数学セミナーも行った。このセミナーには、あるとき、中学三年生が箱根強羅から二時間半もかけてやってきて、目を輝かせながら聞いていたことを思い出す。

ある年、このセミナーで対数の発見者ネピアを中心に話すことを思い立ち、ネピアのことを調べていくうちに、次第

にその背景にある数の本質と言わば姿が見えてきて、それが『数の大航海』を書くきっかけとなった。このような本がどのような人たちに読まれているのかなど、私は思ってもみなかった。しかし後で聞くと、現在東工大におられる桜井

進さんは、いくつかの老人ホームを訪れ、ネピアのことを話されたと言うことを伺った。このとき、皆さんは一生懸命、楽しそうに聞いておられたそうである。実際これとは別に、この本を読んでネピアの生涯に感銘を受けたご夫婦は、スコットランドまで行って、ネピアが二〇年間そこにこもって対数の研究に没頭したマーチェストーン城を訪れたそうで、そのときに撮った写真を見せながら、いかにも楽しそうに話して下さった。

本を著す身になってみると、このような隠れた愛読者の存在を知るとは、本当に嬉しいものである。以前は読者カードが挿入されるようなこともあり、読者の声や筆者の元に届いたこともあったが、そのような機会も少なくなっているようだ。現在は情報というものが流れていく世の中になってしまったが、私は、書物が、筆者と読者の深い絆を与えてくれるヒューメインな役目を、いつまでも果たしていただけることを望んでいる。

志賀浩二(しがこうじ)

一九三〇年新潟県生まれ。一九五三年新潟大学理学部数学科卒業。一九五五年東京大学大学院数物系修士課程修了。東京工業大学助教授、教授を経て桐蔭横浜大学教授などを歴任。東京工業大学名誉教授。

JCOPYの意義とその役割

JCOPY専務理事 早川義英

JCOPY（一般社団法人出版者著作権管理機構）は、自然科学書協会員の各位にはすでにご案内のように、出版者著作権協議会（出著協）を母体に、自然科学書協会と医書出版協会のご支援で設立された(株)日本著作出版権管理システム（JCLS）本年二月一〇日解散）の著作権等管理事業を引き継いだ、商業出版社が発行する雑誌・書籍の複写に関する権利を管理する文化庁登録団体です。

企業や団体においては、著作物の複写（コピー）をすることを、日常的に、当たり前のように行っています。著作物の複写には権利者の許諾が必要であるにも拘らず、「黙っていればどうせ分らないだろう」とか「会社の業務に使うものは私的の使用だから（著作権法三〇条へ私的使用）の拡大解釈」といった理屈で無許諾複写が横行しているのが実態です。このような状態を改め、企業・団体が購入した著作物を、例えば企画会議や営業会議といった会議用または研究用といった業務用に使するための複写に對して、包括的に許諾を与えることによって違法行為を出来る限り防ごうとの趣旨で集中権利処理機構の必要性が従前より言われてきました。一九九一年に文化庁の肝いりで設立された日本複写権センター（JRRC）の、

設立以来のページ二円という複写使用料は変わっていません。また、委託者が許諾条件を指定する特別許諾の方式の復活の道筋も見えています。JRRCの使用料規程が改定され、JCOPY（旧・出著協）が納得できる改定がなされれば、JCOPYが受託している全ての著作物をJRRCに再委託することが可能になります。しかし、JRRCにおける使用料規程の改定に関する検討を長年行っているとはいえ、改定がいつになるのか現時点では予測が立たない状況です。

出版物は購読され、また幅広く利用されてこそ、その意義も大きいものだと考えます。したがって権利者は複写されることを拒むものではなく、ある意味、積極的に許諾を行うことによって、著作物を正しく利用してもらうことを考えるべきでしょう。著作物の利用を拒めば拒むほど、無許諾の違法複写（複製）が蔓延するのではないかと考えます。そのためには、JCOPYは文化庁登録の著作権等管理事業者として、今まで以上に受託著作物を増やして管理をするとともに、積極的に複写利用者ととの契約を推進していかなければならないと考えています。

また、著作物利用においては、いまのIT環境下、PDFに代表されるデジタル化問題を避けては通れないと考えました。JCOPYでは利用者による著作物のデジタル化問題にも対応すべく、すでに検討を始めているところです。自然科学書協会員の各位には、なお一層のご支援ご協力を願う次第です。